

記録の中の沖縄 クラッターバック写真アルバムと紀行文「旅と冒険」

外間一先¹⁾

Okinawa in the Photo record

Kazuyuki HOKAMA¹⁾

Abstract

Okinawa, which became a battlefield in World War II (Okinawa War), was reduced to ashes, and many of the photographs that recorded the pre-war scene were burned down. For this reason, photographs of the scenery of Okinawa and the daily life of people during the Meiji and Taisho eras are valuable materials. After the war, the scars are recorded, such as the area around Shuri Castle, which became a burnt field, and photos of cultural assets that were bombarded with shells. In addition, the color photograph which took the townscape of Okinawa which gradually recovered from the end of the war contains colorful original scenery and the strong power to live people.

The museum has a large collection of photographs taken from pre-war Okinawa, glass plates, cameras, as well as photographs and video films immediately after the end of the war and before and after the return of the war. From these photographic and video materials, the main collection is reflected with the photographer's record, and it is an opportunity to explore the charm contained in the photograph and the image.

はじめに

第二次世界大戦（沖縄戦）で戦場となった沖縄は多くのものが灰燼に帰し、戦前の光景を記録した写真も多くが焼失した。そのため明治や大正時代の沖縄の景色や人々の日常の様子を記録した写真は貴重な資料である。当館が所蔵する戦後写真については、焼け野原になった首里城周辺や砲弾を浴びた文化財の写真など傷痕生々しい様子が記録されている。また終戦から次第に復興していく沖縄の街並を撮影したカラー写真には、色鮮やかな原風景や人々の生きるたくましい様子が見える。¹⁾

当館はこれまでに戦前の沖縄を撮影した写真、ガラス乾板、カメラ、さらに終戦直後や復帰前後の写真及び映像フィルムを多数収集してきた。海外から訪れた人物が撮影した写真や県外から転勤してきた人物が撮影した写真、戦後復興のために戦前の文化

財を撮影した写真を集めた人物の写真資料などである。それらの写真の中から、今回は1898年にクラッターバックによって撮影された写真と彼の紀行文を紹介する。

1. クラッターバック写真アルバムの来歴

当館が所蔵する戦前の沖縄を記録した写真の中で最も古いものがクラッターバックの写真アルバム『Old Japan』（写真1）である。

当館の『博物館 収蔵品目録【2001～2016年度】』には2007年度にテリー・ベネット氏よりアルバムを購入した記録がある。当館が新館建設時に購入した資料である。「(2007年秋の新館開館に向けて) 沖縄の自然・歴史・文化に関する新しい常設展示をつくるため、沖縄の近代の歴史的な展示に写真を使いたい」と同氏に購入を申し出たとある。²⁾

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

アルバムを保管していたテリー・ベネット氏について、彼は英国の写真史研究家であり、19世紀末から20世紀初頭の日本の写真を収集しホームページやカタログで販売を行っていた人物である。英国内のオークションに掛けられたアルバム『Old Japan』を落札し、県内在住のカメラマンであるラブ・オーシュリ氏さんを通して当館と連絡を取った。オーシュリ氏は当時「19世紀末の貴重な沖縄の写真を散逸させないためにも県内での保存が望ましい」と話し、県内の公的機関による購入・保存を求めている。³⁾



写真1 クラッターバック写真アルバム

2. クラッターバックと写真の内容

英国人紀行家のクラッターバックは、日本旅行の途中に1898年12月から99年1月までの約2ヶ月間沖縄に滞在した。滞在中に撮影した写真を「Sean in the Luchu Island (琉球島の風景)」と題したアルバムにして残している。19世紀末の沖縄を撮影した写真70枚を収めた貴重なアルバムである。守礼門の手前に建っていた中山門をはじめ那覇の市場や港の様子、こうもり傘をさした土族風の男性やかごを頭に載せて歩く女性の姿などが写っている。

また、クラッターバックは1910年頃、英国の冒険雑誌に『TRAVEL & EXPLORATION (旅と冒険)』と題した紀行文を記している。なかには琉球のことが8ページと写真6枚が掲載されている。⁴⁾ 紀行文は、ベネット氏が英国の国立博物館所蔵の雑誌から複写をし、その資料を当館で保管してある。紀行文にある記録をもとに写真内容と照らし合わせて紹

介する。

アルバムのページ数は表紙や見返しも合わせると62ページあり、1ページに1枚あるいは3枚を張り付けている。前半は長崎や鹿児島島の海岸線や農村風景を撮影した写真が9枚掲載されている。アルバムの写真の並びをみると鹿児島から琉球へと航海してきたようである。沖縄本島のことを「Great Lu-Chu」と表記し、中でも「沖縄」を最大かつ重要な島であることを指摘している。鹿児島から那覇までを369マイルと示しており、キロメートルに換算すると594kmになる。鹿児島ー那覇間は直線距離で660kmであり、約60kmの誤差はあるが、ほぼ正確な距離感をもって航海したことが確認できる。その他にも「上海からは、たったの450マイル(約750km)で1時間12ノットで約38時間で到着することや「丘の上にある古都(首里)は那覇から3マイル(約5～6km)」と報告している。また1898年12月から翌年1月までの滞在期間中、気温は寒い時で「華氏55度」であったという。摂氏に換算すると13度ぐらいであり、現在と同じような気温だったといえる。クラッターバックの紀行文は、冒険家として距離や気温など地理的な観点からの記録で始まっている。

2-1 那覇港到着の記録

琉球に到着し、港に入るときの様子については、早朝だったらしく「まだ眠っている那覇の町」に接近を知らせ、夜明けの景色を「空のかすかな黄色のきらめきが、まぶしい光の洪水に変わり、朝の霧によって土地の輪郭が柔らかくなりました。それは美しい朝でした。まるで夢のように暖かく、太陽に照らされていました。」と表現している。

船から見える琉球・那覇については、「壮大な山や印象的な山はなく、なだらかな起伏のある国、低い崖、そして澄んだ白く際立つ那覇の町、背後の土地は緑色で、耕作地や松の木の濃い青が印象的だった」ようである。

また那覇港は「二つの美しいサンゴ礁の砦に守られている」「二つの防波堤の背後の港には多数のマストが立ち上がっていた」という記録がある。このサンゴ礁の砦と二つの防波堤とは、おそらく三重城と屋良座森城のことであろう。

アルバムにおける最初の琉球の写真は「Saiis made of Reeds」とムシロ製の帆をあげたヤンバル船を撮影したものである。続けて「Scenes in Great Luchu」というキャプションが付いている。「琉球の場面」あるいは「琉球の光景」という意味であり、以後7ページにわたり那覇港に停泊する船の写真が5枚掲載されている。

5枚の写真にはサバニや沿岸を航行する船も収められている。なかでも二人の人間が乗船しているサバニの写真について、地元民は20マイル（約32Km）も、この「丸木舟・カヌー」で航海するといった内容のキャプションを付けている。紀行文では「絵のように美しい船である」としつつも老朽化していることも指摘している。これらの老朽化した小型の船に乗って波をスキップするように進み、遠くまで出向する船に驚いていたようであり、興味をもって記録を残している。また「日焼けした男性たちが忙しく働き、掃除や朝食をつくっている」と述べ「島の中でも最も忙しい港」である那覇港の様子を伝えている。（写真2、3）



写真2 那覇港の様子



写真3 那覇港の様子

2-2 地元民との出会い

さて、朝の那覇港に到着したクラッターバックは、船から幅の広いステップを通り沖繩に上陸し地元の人々と接触することになる。

男性、女性、子どもたちが集まり、かなり多くの人々から注目を浴びたようである。さらに約20人の女性が声をかけ、膝まで水につかりながら船に近寄り荷物の運搬を始めることになる。通訳を雇っていたが、群がる人々に対処できずにいたようである。荷物を運ぶ女性たちについては、「素晴らしく楽しく青い刺青の手で荷物をつかんで頭にのせると彼女ら笑いながらすべての荷物を集めた」とある。その後は池端町まで移動し、それぞれに2セン（半ペニー）を支払い解散したと書かれている。市場には卵（1ダース）、ニワトリ、牛肉、豚肉、サツマイモなどが売られていたようで、それらの価格も報告されている。

最初に町を歩いたときの様子について、「みんなが私たちを見つめ、何百人もの子どもたちが顔を覗き込んで叫び、スキップしていた」とのこと。実はクラッターバックの旅には夫人も同行していたことが紀行文や写真から判明している。当時の沖繩の人々がヨーロッパ人の女性と接する機会は少なかったこともあり、ドレスを着用した夫人にも大きな注目が集まったのである。

ところでクラッターバックから見た地元民に対する印象は、非常に面白い表現で書かれている。到着したばかりの彼らにとって、沖繩の人々の性別はまったく同じように見えたというのである。ゆったりとしたダークブルーの着物と髪は結び目で仕上げられていた。3、4日目から男女の違いにわかるようになったとあり、加えて日本本土の人間と比べるとアイヌ人のように毛深いと指摘している。また日本人よりも体格がより健康的であることや、女性も大きく強く見え、若い女の子の多くは大きく、柔らかく、茶色の目をしていて、しばしば「南ヨーロッパ人を思い出させました」と回想している。他にも男女の髪型、簪などについても、よく観察していたようである。写真の中には、「Market woman」「Old women」「Luchuan Ladies」といった頭に荷物を載せて運ぶ姿を撮影したものなど女性の写真14枚が確認できる。



写真4 市場の女性



写真5 荷物を運ぶ女性

2-3 琉球のお墓

沖縄の亀甲墓や破風墓は、現在でもその規模の大きさが注目される。これまでも大正期や昭和初期に沖縄を訪問した人々にとって、沖縄のお墓の形態に興味を示した記録やお墓を撮影した写真は数多く残っている。クラッターバックも沖縄を訪れた多くの人々と同様にお墓に注目した。「偉大な琉球への訪問者の目をひく最初のもは、大きな白い墓の塊であり、それは島中の山腹や目立つ場所に置かれています。白く輝くパッチワークのような景色に目を惹かれることがよくあります。これは琉球の埋葬地です。那覇周辺の風景の大部分には、この種の墓が点在しています。(中略) 実際、町のほぼ4分の1は無名の静かな墓地です。」と紀行文に綴っている。さらにお墓の形状について「丘の側面にある墓室の上部に巨大な馬の蹄鉄(ていてつ)のようなもの」と述べ、亀甲墓の湾曲した部分が馬の蹄に装着する蹄鉄の形に例えて表現している。写真では「tombs

(お墓)」「An Old-world」とキャプションを付け4枚の写真を残している。お墓のサイズを示すために人物を入り込ませている点は、後に紀行文等で公表することを意識していたことがうかがえるところである。(写真6)

お墓についての記述は次のように続く。「墓室は岩からくり抜かれた部屋で、石の平板で数年間閉じられています。(墓の)前には高さ約2フィート6インチ(約75cm)のサンゴの岩に囲まれた芝生の私有地が常にあります。これらの石細工はセメントで白くされているので、遠くからでも目立つようになっています。これらの建築物(お墓)には彫刻や装飾はありません。」

クラッターバックは沖縄滞在中に葬儀にも出くわした。赤い箱(ガン)を運んでいる行列に遭遇し、悲しむ参列者の様子や洗骨に関する記述もある。

また、クラッターバックは、母国へのお土産に「厨子甕」を持ち帰っている。(写真7)「世界の他の地域では見られない興味深いさまざまなコレクション」の中に陶器の厨子甕が入っていたのである。厨子甕については、死者の骨を入れるために使われていることはちゃんと理解していた記述があるのだが、その芸術性に魅力を感じていたようであり「非常にきれいに設計され、明るい青と白の2色で全体に透明釉が施されている」と評価している。厨子甕の梱包には丈夫な外箱を作り、隙間はオガクズで養生して運搬したのだが、残念ながらイギリスに到着したときには壊れていた。こうした沖縄の特産品について、三線や紅型、陶器(カラカラ)、簪、金属製瓶子なども写真に残されている。(写真8)



写真6 お墓と男性モデル



写真7 厨子甕



写真8 三線など特産品

2-4 首里について

首里に関する写真は、中山門や守礼門、継世門に加え首里に向かう道なども含めると12枚がアルバムに収められている。紀行文のなかには、古都首里の町並みが美しいことを次のように述べている。「那覇から首里まで、海拔約300フィートの高台にある実際の道路は一つしかありませんでした。道路の写真からは、景色の魅力がまったくわからないことがあります。景色は非常に多くの光と色で構成されています。道路に張り出した暗い木々、原住民が絶えず往来して、習慣や衣装に関して（ヨーロッパ人は見当たらず）地元のものであり、これらのすべてがとにかく魅力的な光景である」。

クラッターバックは、1879（明治12）年に琉球処分があったことを学んでいたようであり、紀行文には日本本土から来た人々について「conqueror」（征服者）という単語を用いている。また日本が琉球王国を併合したことや、沖縄を離れ東京に住む国王は「刑務所」にいるような状態であると表現した。

クラッターバック一行が沖縄に来たのが1898（明治31）年のことであり、廃藩置県から19年後のことであるが、外国人が、こうした琉球併合という歴史認識をしていたことや日本本土と琉球・沖縄が体格や表情などの形質人類学的な部分及び衣装や風俗など文化人類学的にも異なる部分があることを記録している点は興味深い。西洋列強のイギリス人であるクラッターバック一行が、琉球の位置づけを日本の中でも特異な存在であることを知っていた。明治維新を迎えた日本が近代国家として拡大していくなかで琉球を飲み込んだといわれる琉球併合という事実は、当時の人々に情報として交換されていたことを裏付ける紀行文だといえる。⁵⁾

その他にも、石畳の道を裸足で歩く地元民のことや女性が頭上に荷物を載せて運ぶたくましさや早さ、笑顔の美しさを取り上げている。それから首里の「オオムラ」家に宿泊したことや宿泊先で海藻スープなどの食事の話、豚の脂を整髪に使うことや子どもたちとの交流など様々な内容があり、全体的に沖縄での体験・見聞・感想などを楽しんでいたことが文章や写真から伝わってくる。

3. ギルマールコレクションとの比較

クラッターバック一行よりも16年早い1882（明治15）年に沖縄を訪れ、写真や著書を出版したギルマールというイギリス人がいる。クラッターバックとの交流は定かではないが、同じイギリス人であり何らかの影響があったことも考えられる。当館の博物館紀要第9号（2016年）にギルマールの残した資料を調査した報告書が掲載されている。これらの内容とクラッターバックの紀行文や写真と比較することは、今後有意義なものであると思われる。

ギルマール一行は、イギリスの帆船マーケーザ号に乗って航海し、極東アジアに到着。おそらく1882年6月27日から29日までの3日間、琉球に滞在したと思われる。⁶⁾ 1886年に発表された彼の著書“*The Cruise of the Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago*（「マーケーザ号の航海、カムチャッカ、ニューギニア、台湾、琉球、マレー諸島の島々）」に一連の記録が残されている。那覇港への入港や上陸後の

晚餐、首里城のことや島の人々の形質的特徴、風俗についてなどである。写真も損傷や退色があるものを含めて32枚確認されている。琉球処分直後の様子を見ることが出来る貴重な歴史資料であるが、紀要では廃藩置県直後であり外国人に対して常に厳しい監視があった可能性を指摘している。そのためか「生々しい現実や風俗を写したというよりは、どこか整えられ飾られた写真感がある」としている。一方でクラッターバックは日常生活を捉えた写真が多い印象を与えるものばかりであり、比較することで琉球・沖縄の変化の様子を垣間見ることができるといえる。

9. おわりに

当館は戦前の沖縄を撮影した写真、ガラス乾板、カメラ、さらに終戦直後や復帰前後の写真及び映像フィルムを多数所蔵している。ガラス乾板だけでも215枚、映像フィルムは390本、写真アルバムや絵はがき、スライド写真など多数であり内容も様々で

ある。今後、これらの写真や映像資料を広く公開し「何が写っているのか」「なぜ撮影したのか」「いつの記録なのか」「比較して見えることは何なのか」などが明らかにし、歴史資料としての価値を高めていきたい。

参考文献

- 1) 開館10周年記念 博物館収蔵資料100選 (2018年)、沖縄県立博物館・美術館
- 2) 4) 沖縄県立博物館・美術館歴史資料クラッターバック関係資料ファイル2004年
- 3) 琉球新報2004年4月2日
- 5) ティネッコ・マルコ著『世界史から見た琉球処分』(2017年)、榕樹書林
- 6) 石垣忍、片桐千亜紀、中西裕見子「ケンブリッジ大学所蔵の琉球古写真コレクションーギルマールの見た世界」沖縄県立博物館・美術館博物館紀要第9号 (2016年)

クラッター・バック写真リスト

背表紙 LUCHU 1898/9 CLUTTERBUCK

通番	頁	キャプション	備考	size (cm)
—		クラッター・バック写真 表紙	緑色 (背表紙は黒)	—
—	01	W.J.Clutterbuck Decr98-Jan99 Seans in the Luchu Islands about 400miles ss of Japan		—
1	02-1	Off the coast of Kyushu	Japan	8.2×10.8
2	02-2	Coal-mines near Nagazaki		8.2×9.7
3	03	Near nagazaki	Japan	7.5×9.6
4	04	Travelling in Kyushu	Japan	7.5×9.5
5	05-1	Pumping water onto Rice fielde①	Japan	7.2×9.9
6	05-2	Pumping water onto Rice fielde②	Japan	7.5×9.8
7	06	A Cemetery at Kagoshima	Japan	7.2×9.9
8	07-1	Leaving Japan	Japan	7.9×9.5
9	07-2	Mnt Kaimondake		7.2×9.5
10	08	Sails made of Reeds	Scenes in Gear Luchu	7.1×10.0
11	09	At Naha	Naha	7.5×9.5
12	10-1	A “dog-out” canoe hatives went 20miles out sea in these	Naha	7.3×9.4
13	10-2	A coasting broat		7.5×9.3
14	11	A Reed sail	Naha	7.4×9.5
15	12-1	Stalls neat Market at naha①	Naha	7.3×9.4

通番	頁	キャプション	備考	size (cm)
16	12-2	Stalls neat Market at naha②	Naha	7.4×9.9
17	13	Our Japanese Interpreter "Masuda"		9.3×6.8
18	14-1	On his pony①		7.4×10.0
19	14-2	On his pony②		7.5×10.0
20	15	Native saddle & bridle		7.3×9.9
21	16-1	Market women	Naha	7.5×10.0
22	16-2	One child on back Leading another	Naha	7.2×9.7
23	17	The only pig we ever saw being driven	near Shuri	7.4×9.6
24	18-1	Luchuan goars		7.3×9.8
25	18-2	Old women		7.4×9.7
26	19	Luchuan		7.4×9.9
27	20	Tombs		9.7×7.4
28	21	An Old-world Sepulchre①		7.5×9.8
29	22-1	An Old-world Sepulchre②		7.2×10.0
30	22-2	A Luchuan Coffin		7.6×9.3
31	23	My wife's Model		7.5×10.0
32	24	Across the Sands		7.2×9.8
33	25-1	On the Road		7.4×10.1
34	25-2	from Naha to Shuri		7.5×9.5
35	26	Natives		7.3×9.7
36	27	Approaching the Potteries		7.2×9.8
37	28-1	The Potteries①		7.5×9.8
38	28-2	The Potteries②		7.3×9.8
39	29-1	A paper maker's abode①	Shuri	7.3×9.8
40	29-2	A paper maker's abode②	Shuri	7.4×10.2
41	30	On the only road		7.5×9.6
42	31	The first gate	at Shuri	7.3×9.8
43	32	The second gate	at Shuri	7.3×10.0
44	33	Leading ponies		7.6×10.0
45	34	Up-hill to Shuri		7.2×9.8
46	35-1	Native shop		7.3×9.8
47	35-2	In the temple grounds at Shuri		7.3×9.9
48	36	Deserted Shrine outside the fortifications Shuri Castle		7.2×10.1
49	37	A "gazimaru" tree the Market place		7.2×9.8
50	38	Mother & daughler at their devotions	Shuri	7.5×9.9
51	39	Nearly eveyr hause was surrounded will a fence of trees or reeds		7.3×9.9
52	40	from our verandah Shuri		9.8×7.5
53	41	Just below our house at Shuri		7.4×10.1
54	42-1	A Native Pig-sty		7.3×9.8
55	42-2	The streets of Shuri seemed always full of women,- mostly carrying loads		7.3×9.8
56	43	Going to Naha about 4 mailes distant		6.9×9.4
57	44	Crossing at low tide		7.3×9.8

通番	頁	キャプション	備考	size (cm)
58	45	Laden ponies		7.8×10.0
59	46-1	Sago Palms		7.4×9.5
60	46-2	A dog-out		7.3×9.4
61	47	Luchuan Ladies		7.2×8.7
62	48	A deserted street in Naha		7.2×9.1
63	49	unawares	Shuri	7.3×9.8
64	50-1	Ordinary Luchuan roads①		7.2×5.2
65	50-2	Ordinary Luchuan roads②		7.3×9.8
66	51-1	Street in village①		7.2×9.5
67	51-2	Street in village②		7.1×9.4
68	52	Houses not protected by trees		7.1×9.8
69	53	One of the four gates into Shuri Castle		7.4×10.0
70	54	On the road		7.4×10.0
71	55-1	Streert scenes in Shuri①		6.6×9.3
72	55-2	Streert scenes in Shuri②		7.1×8.7
73	56	At naha again		7.3×9.8
74	57	Boats in port		7.2×9.4
75	58-1	An Oily calm①		7.4×10.0
76	58-2	An Oily calm②		7.2×9.7
77	59	going out to the ship		7.8×9.7
78	60	Adieu luchu	At Sea	6.7×10.0
79	61-1	Jaoan Again		6.6×9.4
80	61-2	Nearing land		7.8×9.5
81	62	Luchuan guitar Pewter pots for holding spirit at a funeral Horn spoom for Womens hair Painted hand-made linen		7.1×9.6